

生化学検査と血液検査の国内市場を調査

2010年見込み

生化学検査市場

検査数：32億2,221万件（前年比0.9%増）、金額：534億円（同1.3%増）

血液検査市場

検査数：30億751万件（前年比0.7%増）、金額：329億円（同2.8%増）

総合マーケティングビジネスの株式会社富士経済（東京都中央区日本橋小伝馬町 社長 阿部 界 03-3664-5811）は、血液や尿などの検体から病状等を調べる臨床検査を検査領域毎に分割し、昨年から2年間で国内市場を網羅する調査を行っている。今回はその第二回目として生化学的検査（生化学検査）と、血液の凝固・線溶系検査をはじめとする血液学的検査（血液検査）の市場を調査した。その結果を報告書「2010 臨床検査市場 No.2（生化学検査・血液検査市場）」にまとめた。

この報告書では、生化学検査と血液検査の検査数及び金額（試薬の売り上げ）の市場、同時に各検査領域で使用される分析装置の市場を分析し、将来を予測した。

尚、生化学検査は、生化学的測定法に基づくものであるが、HbA1c（糖尿病関連検査）については例外的にラテックス定量法、TIA法といった免疫学的測定法を含んでいる。

また、血液検査は、血液の凝固線溶系検査と血球計数検査、血液像分類検査を対象としている。

生化学検査の一部の検査項目及び血球計数検査、血液像分類検査に関しては分析装置の試薬（消耗品）を試薬の売り上げとしている。

< 調査結果の概要 >

生化学検査市場

	2009年	2010年見込	2009年比
検査数	31億9,263万件	32億2,221万件	100.9%
金額	527億円	534億円	101.3%

血液検査市場

		2009年	2010年見込	2009年比
血液凝固線溶系検査	検査数	1億 502万件	1億1,288万件	107.5%
	金額	109億円	114億円	104.6%
血球計数検査	検査数	27億3,010万件	27億4,380万件	100.5%
	金額	204億円	208億円	102.0%
血液像分類検査	検査数	1億5,068万件	1億5,083万件	100.1%
	金額	7億円	7億円	100.0%
合計	検査数	29億8,580万件	30億 751万件	100.7%
	金額	320億円	329億円	102.8%

1. 生化学検査市場

2009年の生化学検査は、検査数が前年比1.7%増の31億9,263万件、金額（試薬の売り上げ）が前年比1.2%増の527億円の市場となった。市場が前年を上回ったのは、脂質や糖質関連の検査項目の伸びによるところが大きく、特に金額では一部例外的に含めている糖質関連の免疫学的測定法の試薬の売り上げが大きく貢献している。純然たる生化学検査の金額の伸びは前年比0.8%増程度である。

2010年は、検査数が前年比0.9%増の32億2,221万件、金額が前年比1.3%増の534億円の市場が見込まれる。2年に一度実施される保険改定では、生化学検査の実施料の前回比マイナス改定が繰り返され、その度に試薬の価格は低下を余儀なくされてきたが、2010年の保険改定では、実施料のマイナス改定がほぼ無く、金額市場には好材料となりそうである。しかし、競争による試薬の低価格化、自動化学分析装置の試薬消費量の微量化が進んでおり、2011年以降検査数は微増、金額は検査数の伸びを更に下回り推移すると予想される。

2. 血液検査市場

2009年の血液凝固線溶系検査は、検査数が1億502万件、金額が109億円の市場となった。既に飽和している市場だが、2007年、2008年と分析装置や参入企業が増えたことなどにより、一部の検査項目で実績が伸びている。また、血液の抗凝固剤・ワーファリン製剤投与患者の管理指標として発売されたPT-INR（血液の凝固因子に関する検査項目の一つ）の実績が伸びている。

血球計数検査は検査数27億3,010万件、金額204億円、血液像分類検査は検査数1億5,068万件、金額7億円の市場となった。両検査は飽和しており、検査数及び金額ともに横ばいにある。検査の自然増により今後この傾向は続くと予想される。

<注目検査項目市場>

LDLコレステロール（LDL-C）、HDLコレステロール（HDL-C） <生化学検査>

		2009年	2010年見込	2009年比
LDL-C	検査数	1億 586万件	1億1,551万件	109.1%
	金額	25億円	27億円	108.0%
HDL-C	検査数	1億1,361万件	1億1,277万件	99.3%
	金額	29億円	28億円	96.6%

コレステロールは、血中のコレステロール値を見て脂質代謝異常の診断や治療の判断に用いられる脂質関連の検査項目である。コレステロールは成分別にLDL、HDLなどに分けることができる。HDLは、体内の血管や組織から余分なコレステロールを集め肝臓に転送する。余分なコレステロールを肝臓に運ぶことで血管内の掃除を行い、その結果として動脈硬化を予防することから「善玉」とされる。LDLは、肝臓から体の中で必要とされる組織（細胞）にコレステロールを運ぶが、細胞内に取り込まれなかった余剰なコレステロールが血管内に残り、動脈硬化を引き起こす原因となることから「悪玉」とされる。2008年に開始された特定健診では、脂質の検査項目としてHDL-C、LDL-Cとも検査実施が義務付けられた。

先発して開発され、普及した試薬はHDL-Cであるが、2006年頃から検査数の伸びが鈍化し、LDL-Cの検査数が急激に伸び始めた。脂質異常症の診断基準にLDL-Cの値が採用されたことや、スタチン系薬剤（血液中のコレステロール値を低下させる薬物の総称）の投与でLDL-C値が変動することからその薬効評価に採用されるなど、LDL-Cの検査を実施する機会が増えたためである。

2009年は、LDL-Cの検査を実施する機会が増えたことや、LDL-Cの評価が高まったことでHDL-Cに代わりLDL-Cの検査を第一選択とするケースが増えたことで、LDL-Cの検査数は引き続き大きく伸びた。一方でHDL-Cの検査数は減少に転じている。

HbA1c <生化学検査>

		2009年	2010年見込	2009年比
検査数		1億 47万件	1億1,093万件	110.4%
金額		116億円	125億円	107.8%

HbA1cは、糖尿病の診断や治療の判断に用いられる検査項目である。HbA1cの値で過去1～2ヶ月の血糖値の状態がわかる。測定方法は、HPLC法と酵素法その他、免疫的測定法であるラテックス定量法、TIA法がある。最初にHPLC法が普及し、続いてラテックス定量法が普及した。精度の高いHPLC法は主に病院、自動化学分析装置で測定できる大量処理に適したラテックス定量法は主に検査センターで採用されており、両測定法でHbA1c全検査数の90%近くを占める（2009年）、2008年に開始された特定健診では、糖尿病関連として選択される検査項目の一つとなっている。

2006年に発売された酵素法が自動化学分析装置で測定できるためラテックス定量法と競合し、一部のユーザーではラテックス定量法から酵素法への移行が進んでいる。しかし、特定健診の開始で酵素法だけでなくラテックス定量法の検査数も伸びている。また、この特定健診により顕在化した患者の病院での治療の増加に伴い、HPLC法の検査数も伸びている。

以上

<調査対象>

	試薬	装置
生化学検査	生化学検査試薬	自動化学分析装置、簡易分析装置、電解質分析装置、血液ガス分析装置、血糖分析装置、HPLC装置
血液検査	血液凝固線溶系検査試薬、血球計数検査試薬(消耗品)、血液像分類検査試薬(消耗品)	血液ガス分析装置、血液凝固装置、血球計数装置、血液像自動分類装置
その他	コントロール血清	

<調査方法>

富士経済専門調査員による調査対象企業及び関連企業・団体等へのヒアリング調査及び関連文献を併用

<調査期間>

2009年11月～2010年3月

資料タイトル:「2010 臨床検査市場 No.2 (生化学検査・血液検査市場)」
 体裁 : A4判 264頁
 価格 : 200,000円(税込み210,000円)
 CD-ROM付価格 215,000円(税込み225,750円)
 調査・編集 : 富士経済 東京マーケティング本部 第二事業部
 TEL:03-3664-5831 FAX:03-3661-9778
 発行所 : 株式会社 富士経済
 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2-5 F・Kビル
 TEL03-3664-5811 (代) FAX 03-3661-0165 e-mail:info@fuji-keizai.co.jp
 この情報はホームページでもご覧いただけます。
 URL : <http://www.group.fuji-keizai.co.jp/> <https://www.fuji-keizai.co.jp/>